

本澤二郎の「歴史の真実」（中国吉林省公文書館資料シンポ）社会科学院が主催 安倍自公内閣に痛撃（1） 2014年09月06日

<極右政権の歴史の美化・嘘は通用しない>

戦後69年、2014年9月1日の北京は珍しく雨模様だったが、東西を走る長安街の一角にそそり立つ社会科学院のビルは、国際学術討論会で熱く燃えていた。新華社通信やCCTV・光明日報など北京を代表する報道陣が殺到した。「吉林省公文書館秘蔵の日本中国侵略資料国際学術討論会」が同日、朝から夕刻まで熱心に繰り広げられたからである。筆者にも声がかかり、急きょ参加、極右・安倍晋三の歴史認識を披歴する機会もあった。不本意ながら「自衛戦争論者として東京裁判否定の靖国参拝派」「A級戦犯も国の礎・日本は天皇中心の神の国」など神がかりの政治信条に固執する日本首相の正体の一部を披歴した。極右・自公政権の過去の侵略戦争美化・大嘘は通用しない。

<ロシア・豪州・オーストリア・韓国・台湾の学者らも勢ぞろい>

8月31日午後、初めて羽田空港から中国国際航空で北京に飛んだ。この日の北京上空は厚い雨雲が覆っていて、なかなか空港に降りられなかったほど、大雨がコンクリートで敷き詰められた大地を、容赦なく叩きつけていた。

数日間の雨のお陰で、その後に其れこそ何十年ぶりに「北京秋天」を拝むことが出来た。北京市内で深呼吸する場面も手にした。

遅れて到着した東京からの来客にも、社研日本研究所の関係者は、夕食会の食事を振る舞ってくれた。日本研究所・李薇所長の配慮には、いつもながら感心する。

円テーブルのそばに吉林大学教授の沈海濤、その横に英語・中国語と日本語も少し話すロシア人学者もいた。ロシア人との接触のない日本人なので、せっかくの機会を拝借して「北方領土4島返還は考えられか」という質問をした。彼は、ごく当たり前のように否定した。

平和条約締結時の2島返還論で決着をつけるしかないという、筆者の見解と一致した。日本人は、極右政治屋・安倍の大風呂敷に誤魔化されてはなるまい。政治屋は嘘を突くが、政治家は嘘をついてはならない。

夕食会には、安倍好みの豪州からも学者が来ていた。欧州からドイツ人でオーストリアの大学教授、韓国や台湾の専門家も集まっていた。

慰安婦問題の中国権威者・上海師範大学の蘇智良教授とは、実に久しぶりの再会である。彼が主催したシンポジウムに筆者は、ナベツネの前の読売政治部長を歴任した多田実さんを同行したものだ。

硫黄島戦の生き残り組の多田さんの衝撃的な証言、それは悪逆非道な中国での日本兵のことだが、

そのことを忘れることは出来ない。

<分厚い「鉄証如山」に圧倒>

さっそく吉林省公文書館の関東軍資料でまとめた「鉄証如山」というタイトルの分厚い本を手にした。証拠資料のごく一部を本の中に載せてあるだけで、手に取った人を圧倒する歴史の重みを感じることが出来る。

正に歴史の真実そのものである。隠しようがない。歪曲・ねつ造は不可能である。石原慎太郎のような極右が、どんなに「南京大虐殺は幻」と繰り返し大嘘をついても、過去を封じることは出来ない、無駄なことである。

9月3日は日本が無条件降伏に署名した8.15に次ぐ敗戦日、多くの日本国民はこの敗戦によって、天皇制国家主義から解放され、自由の身となった記念すべき日でもある。侵略を受けた国々にとっての戦勝記念日。北京では盧溝橋の抗日戦争記念館で、初めての国家主催の戦勝記念日が挙行された。これまた、安倍の極右政権の、悪しき成果としてアジアの人々の記憶に残るだろう。

2014年9月3日は忘れがたい日である。

<関東軍保管の書類>

戦争は、人間・人類にとって最悪・もっとも悲惨な出来事である。人間であれば、誰もがこれの阻止に立ち上がる義務がある。そのために事前に真実をつかみ、それを教訓とすることで、これの予防線を張ってゆく。其れも人間の出来る行為である。

他方、アジア諸国民と日本の民衆にとっての加害者である日本の戦争指導勢力・右翼は、これを秘匿することに必死だ。相手の証拠の不十分さをよいことに、なかった、ねつ造だと開き直る。

今回の吉林省公文書館秘蔵の関東軍資料は、それを蹴散らしてしまった。安倍の大嘘は通用しない。歴史の真実を覆い隠しての信頼・友好はありえない。

関東軍保管の日本軍資料に誰も盾突くことは出来ない。

<ソ連軍急襲に消却放棄>

敗戦時の日本の天皇制国家主義の勢力は、天皇制の存続と免責に狂奔、敗戦処理に失敗した。それが広島と長崎の原爆投下を可能にさせた。天皇責任ほど明白な史実はないだろう。最近、学者らが天皇責任を公にしたようだが、遅きに失する。

広島・長崎に次いでソ連軍が、関東軍に襲いかかった。この時点で、大本営は侵略戦争関連の膨大な証拠隠滅を指令したが、ソ連軍の急襲が其れを阻んでしまった。焼却処分されたはずの証拠が、

関東軍の本拠地で見つかったのである。

その一部が出版されたのである。日本の歴史研究者は「鉄証如山」（吉林省出版）を取り寄せて、ぜひとも改めて中国侵略の暴走に焦点を当てて見てほしい。

南京大虐殺や生体実験の悪魔の医師団・731部隊、そこへと投げ込まれる中国人捕虜など、加害の事実が証明されている。

<逃げられない歴史の真実>

生前の中国外交部OBの肖向前さんは「日本が歴史をねつ造したりすれば、その都度、新たな歴史の真実が明らかになる」と予言していたが、安倍・自公政権によって、侵略を裏付ける証拠が次々と表面化している。

吉林省公文書館の資料もそうした一つに違いない。

人間は記憶する。それを書き遺すことも出来る。時間を超克することも出来る。真実に蓋をすることは出来ない。たとえヒトラーの真似をして繰り返し、嘘をついても、嘘が真実になることは出来ない。

天皇を神とあがめるのは自由だ。だからと言って、天皇の戦争を自衛戦争だと言い張っても無駄なことである。天皇責任は常識のある日本人は、みなそう考え、信じている。人間はみな失敗や間違いをする。それを封じ込めることは出来ない。

1993年3月、1ヵ月ほど米務省が取材の機会を作ってくれた。案内役のW・バレット氏は「アメリカでは嘘は通用しない。必ず暴かれるアメリカ社会を忘れないでほしい」といった言葉を記憶している。

嘘を突く日本人は、人類から嫌われる。（2014年9月6日記）

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080032.html>

本澤二郎の「歴史の真実」（中国吉林省公文書館資料シンポ）社会科学院主催 安倍・自公政権に痛撃（2） 2014年09月07日

<関東軍の公式見解>

吉林省公文書館秘蔵の資料公開によって、日本の右翼の学者・新聞テレビ関係者らは、もはや史実をねつ造・歪曲することは出来ない。南京大虐殺や731部隊の生体実験、慰安婦・性奴隷に蓋をかけることは不可能である。ことほど吉林省の資料公開は、関東軍憲兵隊司令部が作成した決定的な証拠である。関東軍保管資料は、まさに超1級、しかもそれを出版したことで、世界の学者が

目を通すことが出来る。皮肉にも安倍・自公極右政権の誕生が、歴史の真実を暴いたことになる。

<南京人口 100 万人>

いずれ日本語・英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語などに翻訳することになる。無教養の代表などとささやかれている官房長官は、国連人権委員会の報告書に異議を申し立てたようだが、従軍慰安婦問題は事実であって、異議を認めない、と却下した。

安倍の仲間たちは、日本の一般人を代表していない。特定秘密保護法や集団的自衛権行使という改憲軍拡・戦争体制にのめり込んだことで、内閣支持率は低下した。これを少しでも上げようとして、多くの女性軍を内閣（9月3日の改造）に登用したが、一見して不気味・異様な印象を与えている。

女性の特権は平和主義であるが、ほとんどが日本会議とかいう極右団体の構成員など、安倍主義にのめり込んだ女性政治屋ばかりだと、周囲から見られている。好戦派の女性は、男性のそれよりも始末が悪い。

中国政府は南京の大虐殺人口について、30 万人と公表している。これに対して、日本の右翼は「当時の南京に 30 万人はいない」と反論、あまつさえ「証拠を見せろ」と反撃、歴史教科書から事実上、抹殺させてしまった。

いまの中学・高校の歴史教科書には、南京大虐殺という名称さえ使わせない。確か南京事件と小さく載せているにすぎない。文科省が教科書会社を抑えつけてしまっている。極右作成の「つくる会」の皇国史観史は、松下政経塾の首長のもとで採用された。国際社会の常識に反する愚か過ぎる対応である。

実際は、憲兵隊司令官の報告書の中に「南京人口 100 万人」が繰り返し記述されている。

<極右・石原慎太郎の大嘘露呈>

筆者は岸信介内閣の防衛庁長官だった赤城宗徳に、大虐殺のことを聞いたことがある。彼は大虐殺直後に現地を視察していた。「民家の壁に殺害された市民の血がこびりついていた。虐殺は間違いない」と語った。

赤城は、60 年安保の市民・学生・労働者の怒りのデモに対して、岸が自衛隊の出動を再三、促したことに抵抗したことで知られる。「いつでも辞表を出せるようにしていた」とも。赤城もまた、宇都宮徳馬と同様、旧制水戸校のリベラル派だった。

事情通の間で、徳洲会疑獄の A 級戦犯と見られている石原慎太郎は、安倍に擦り寄って危機を脱出したとされる。だが、まだ決着はついていない。同会改革派の活動は、まだ始まったばかりである。

今回の関東軍資料によって「南京大虐殺は幻」という石原の主張は、大嘘であることが露呈したことになる。

思うに、国家主義の岸に抵抗した宇都宮は、岸の子分のような石原とも選挙区で対決した。石原は弟の俳優を利用して政界に出てきた。あたかも極右は、タレント・女性起用で国民の目を誤魔化そうとすることに長けている。

石原家は3人もの国会議員を擁している。背後に宗教団体が支援しているのだが、ここに日本の極右化と民度の低さを露呈して余りある。

<石原よ！「鉄証如山」を読み>

仮にも石原は作家を名乗ってきた。本を読むことが出来るだろう。是非とも「鉄証如山」を読んでもらいたい。いやだろうが、彼の好きな憲兵隊司令官の報告書が目に飛び込んでくる。

現物のコピーを印刷したものだ。偽造を心配するようなら吉林省公文書館を訪問したらよい。親切に応じてもらえるだろう。日本人の蛮行が次々と記録されているが、そこから歴史の教訓を学ぶしかない。

人間であれば、そうするだろう。必ず読んで、大虐殺の真実を知ってもらいたいものである。

<大虐殺の後に30万人>

憲兵隊司令部の記録によると、大虐殺が強行された後の南京市の人口が30万人である。細かいことに目が向く日本人である。日本侵略軍は現地に自治委員会を設置して、市民活動を掌握した。そのことも憲兵隊の主要任務だった。

多くが殺害され、一部が逃亡したが、大虐殺で100万人の南京市が30万人に減少した。現地憲兵隊司令官の報告書は、そのことを後世に伝えている。

生き残った30万人は、避難民であろう。虐殺者30万人、残る40万人のその後も気になる。

<歴史は金で買えない>

安倍は50カ国近い国々を飛び歩いている。外国にいと批判される確率が少ないからである。アベノミクスの崩壊や庶民の台所に気を使う必要もない。行く先々で金をばらまいている。1,000兆円以上の借金大国のやることではない。総計すると、どれくらいになるだろうか。野党議員は質問主意書で知ることが出来る。国民の代表であるならば、これくらいのことは国民に知らせる義務があるろう。

インドの新首相は、安倍のバラマキに気付いて日本を訪問して、高額の援助金の約束を手にした。見返りは、財閥が狂喜する武器購入である。バングラディシュ訪問では、金の見返りに国連の非常任理事国に立候補せず、日本を支持するというのである。

安倍後の政府は困惑するだろう。言えることは、金で歴史の真実を手にするには出来ない。(2014年9月7日 記)

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080096.html>

本澤二郎の「歴史の真実」(中国吉林省公文書館資料シンポ) 社会科学院主催 安倍・自公政権に痛撃(3) 2014年09月08日

<南京大虐殺の真実>

「南京大虐殺は幻」とわめき散らしてきた極右の石原慎太郎の主張は、吉林省公文書館資料の公開によって、あっけなく葬り去られてしまった。現地派遣軍の憲兵隊司令官の記録に「100万人の南京市が事変後に30万人になった」と何度もある。

同司令官による「軍紀の弛緩」もその中に。南京侵略軍の蛮行は世界の戦争史上、類例のない悪逆非道なものだった。ふと1995年、戦後50年の南京訪問を思い出した。

<戦争遺児や目撃者も>

当時の訪問記「南京に立つ」にも触れておいたのだが、戦後50年の50人編成の南京と盧溝橋への平和行脚は、前年12月30日、中山太郎元外相秘書だった有澤志郎君と当時人民日報国際版編集長をしていた張虎生さんと食事をしていた際に、95年の南京訪問計画を打ち明けた。

彼はひどく喜んでくれた。95年1月7日、千葉県木更津市の小料理店「金本」での仲良しグループの新年会で、正式に披歴した。その後に朝日・東京・千葉日報が取り上げてくれて、丁度50人の参加者が集まった。

このメンバーの中には、現在東京都大田区長の松原忠義・宇都宮徳馬秘書もいた。差別社会・秋田県本庄市から故郷に戻って、自立への道を踏み出したばかりの戦争遺児・影山友子も、知り合いを誘って参加していた。戦場で散った父親の顔も知らないで育った、敗戦の1945年生まれ、50歳だった。

父親は硫黄島の海で人生を奪われたが、その前に中国侵略軍の1員にもさせられていた。芸術家志望は、中国時代の写真や派遣先の記録を残していた。

彼女は南京大虐殺記念館の現場に立つと、そこで見た「屠殺」という文字に驚愕した。そこに父

親がいなかったことを確認して安堵したらしい。

<3ヵ月後も大虐殺する天皇軍隊>

86歳の辻田照二さんの姿もあった。息子の昇さん、当時和田町町議が付き添った。上海から南京に向かう車中、目の前の照二さんに「どうして南京なのか」と一言声をかけたことが、筆者だけの大スクープを手にした。彼は大虐殺の目撃者だったのだ。この計画の成功を証明してくれた。

現場に立つことなく、当時の南京に30万人はいない、嘘だ、と吹聴する、戦争加担勢力・右翼の、ためにする攻撃的言動には、正直なところ、腹わたが煮えくりかえる思いだが、歴史の歪曲・ねつ造は必ず化けの皮が剥がされるものだ。

「私は東京でタクシー運転手をしていた。そのため自動車部隊に所属、司令官を乗せたりしていた。大虐殺は本当にあった。3ヵ月後の南京をこの目で見た」と話始めた。

「関東軍情報将校は南京城が陥落した直後の1週間が特にひどかった。司令官到着前の3日間がすごかった、と聞かされていたが、3ヵ月後も続いていた」と強調した。

これは多くの学者らの研究にも反する目撃談である。

<揚子江での銃殺惨状>

戦争とは、相手国民を皆殺しにするという皇軍の掟が存在するのだろうか。

それは3ヵ月後の南京郊外の揚子江でも繰り広げられていた。彼がなぜ3ヵ月後の目撃者だったのか。負傷して野戦病院で治療を受けていて、南京着が遅れたためだ。

日本軍の蛮行は、南京攻略直後のそれを容易に想像できるが、3ヵ月後でも、となると、これは戦争史上、特別に記録されてしかなるべきだろう。

「揚子江にドラム缶を浮かべて、その上に板を縛りつけ、そこへと拘束した市民を追い込んで、日本兵が次々と銃殺してゆく。信じがたい殺伐とした恐ろしい光景だった。“お前も撃つか”と言われたが、とてもハイと従うわけにはいかなかった」

拘束された市民は、身を隠した国民党軍兵士だとしても、捕虜の無差別銃殺は国際法に違反する。そこに無関係な第三者はいなかったか。多くの市民が、揚子江上で銃殺されてゆくサマに将校付の運転手は、大虐殺の身の毛もよだつような恐怖を膚で感じさせられた。

「銃弾で撃たれて、もんどりうって揚子江に沈むと、その直後5メートル先に浮いてくる。其の時の激しい怒りと憎しみの眼光・形相を今も覚えている。忘れられない」と打ち明けてくれた。

「そのうちに銃弾が無くなってくると、次は銃剣で突き殺す。刺し方が悪いと、抜けなくなる。そうすると、ねじる。ねじらないと抜けない。凄惨過ぎる情景だった」

虐殺は揚子江だけではなく。捕虜にスコップを持たせて穴を掘らせる。掘った穴に捕虜を殺して埋めていた。戦争が終わっているのに、なぜ殺すのか。最初は分からなかった。日本軍に捕虜の観念が全くないことが、後で知った」

たとえそうだとしても、銃器を捨てた捕虜を全て殺害する天皇の軍隊、このことだけでも天皇責任は逃れることは出来ない。

<弛緩した日本軍の暴走>

軍紀の乱れは、他にもあろうが、天皇の軍隊は特別だった。敵国の人間を人間と見ない。敵国人を動物以下だと信じ込んでいる天皇の軍隊は、幼いころから天皇主義・選良教育を受けていたことが、蛮行を拡大させた可能性を否定できない。こうした価値観は、啓蒙思想家とされた福沢諭吉の言動にも見られる。その人物が、今も1万円札に載っている。明治は安倍一人に限らない。

捕虜を捕虜として扱わない。市民と兵士の区別さえしない。南京大虐殺は起きるべくして起きたものだ。女性は、レイプの対象と残虐な殺害の対象ともなった。

辻田さんの次の証言は強烈すぎるが、あえて紹介することにする。

「ある日、将校を乗せて市内巡察中、一角でもものすごい女性の悲鳴が聞こえてきた。“そこへ行け”という将校の指示に従った。なんと、民家で日本兵がレイプした後、女性の性器に銃剣を突き刺していた。その悲鳴だった。朝鮮人の通訳に悲鳴の内容を確かめると、早く殺せと泣き叫んでいたことがわかった。その現場を将校は写真に取っていた。彼女の悲鳴は今も耳の奥から聞こえてくる」

驚愕すべき日本兵の蛮行は、世界で類例を見ないものだった。戦争の被害者は決まって婦女子である。一説には「慰安所設置に軍が動くのは、この南京大虐殺から」とされているのだが。

「南京での略奪・強姦はしほうだいだった」

この辻田さんの目撃談は、大虐殺に新たな視点を付与して貴重である。将校付の運転手ゆえのものだった。

<慰安婦業者に天皇の勲章>

従軍慰安婦についても聞いてみた。「日本人女性は少なかった。朝鮮人と中国人の女性が大半だった」という。

少ない日本人はプロの売春婦なのだろうか。彼によると、だいたい300人の日本兵に50人ほどの慰安婦が用意されていた。そうだとすると、南京大虐殺から始まった慰安所開設だったと言えるのかどうか。

日本兵の行く所、慰安所開設は軍務そのものだったのだろう。海軍主計中尉の中曽根康弘は、自分で率先して開設、一時はそれを自慢話のようにしていたらしい。安倍は、中曽根に聞けば持論を変えるしかないだろう。歴史歪曲派は中曽根に教えを請えばいいだろう。

兵士に給与が支払われていたらしい。「1回50円。若い兵士はすぐ終わるが、長い者は催促されていた。くじ引きで順番を決めることもあった。慰安婦の業者には、天皇から勲章が与えられていた」

これは驚きである。勲章が授与される慰安婦業者という点、正に天皇制国家主義の、慰安所開設は主要な任務だったことになる。戦争の慰安所は、天皇の軍隊の重要な一翼を担っていたことになる。

「日本政府は関与していない」「軍隊は関与していない。証拠を見せろ」と開き直ってきた安倍らに、吉林省公文書館資料は明白にNOを突きつけている。日本国民は天皇の軍隊について、今も全く知らされてはいない。(2014年9月8日記)

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080192.html>

本澤二郎の「歴史の真実」(中国吉林省公文書館資料シンポ) 社会科学院主催 安倍・自公政権に痛撃(4) 2014年09月09日

<財閥が支配する日本政治>

中秋節の昨夜、ブルーベリー農家の友人が自宅に訪ねてきた。彼は筆者のブログ読者でもあるため、千葉県の特産品のほとんどを財閥・三井が奪っているという事実を知っていて、そのことも話題となったが、だからといって千葉県人の多くは気付いていない。新聞記者をしながら、足で歩いて来て、ようやく日本の真実に辿り着いたわけだから、一般人が知るわけもない。

仕方ないと諦めていると、現在の安倍・国粋主義内閣の正体を分析できない。自公政権の本当の脅威を見抜けないだろう。財閥が支配する日本政治のことを、今回のシンポジウムの中でも指摘した。これに興味を示した中国人記者が相次いだ。

<財閥を知らない中国人記者>

これは予想外の成果となった。取材に訪れた中国紙の若い記者らが筆者に殺到してきた。その反響の大きさにシンポ会場を抜け出して、何度か取材に応じなければならなくなったほどである。

国営テレビ・CCTVは特別の部屋まで用意して、個別の取材までしてきた。熱心な若手女性記者は、筆者を会場出口まで呼びつけてマイクを向けてきた。彼女は安倍の黒幕である財閥に興味を示してきた。

「財閥とは何か」と率直に聞いてくれたので、逆に「君は財閥を知っているのか」と確認を求めてみた。彼女にとって財閥は初めて聞く言葉だったことが判明した。

日本もそうだが、中国人エリートも財閥を知らない。日本に留学しても、新聞テレビから財閥という言葉が発せられることはない。韓国と異なる日本なのだから。せいぜい敗戦後の財閥解体ぐらいのことである。

戦後は見事に身を隠して負のイメージと決別している。日本人も気付いていない。気付いたジャーナリストや学者もいるが、それを書いたりする、論文にまとめることは出来ない。強行すれば、筆者のように糧道を断たれるからである。

この辺の事情などを中国人学者は知らない。正直に言わせてもらおうと、日本研究は日本の根本的な構造について無知なのである。医学でいうと、臨床面での対症療法レベルである。病気の根源を追及しない西洋医学なのだ。その点、漢方は病の原因を追及して成果を挙げているものの、日本研究では傷口に薬を塗る程度なのだ。

歴史認識が次々と発生する日本政治、いまの自公政権はその最大・最悪の政権なのだが、それでもその背後の黒幕について全く手が届いていない。

ともあれ、一人の女性記者に対して「財閥研究」をお願いした。「やります」と約束してくれた。このことだけでもシンポに参加した意味があった。

<財閥の巧妙な世論操作>

途方もない巨額な資金をあれこれと工作に使用できる財閥のことを、日本人も知らない。40年ほど政界取材をしたおかげで得た筆者の、机上ではなく、足で稼いだ実績である。20年余の東京タイムズの政治記者生活がベースとなったものだ。

20年余も継続しての自民党派閥記者は、おそらく筆者しかいないだろう。東京タイムズに感謝するばかりである。権力の中枢を見聞出来た幸運児となれた。本も沢山書いた。中国語や韓国語にも翻訳された。こんな記者生活は、筆者が最初で最後ではないだろうか。

平和・軍縮派の宇都宮徳馬に出会えたことも幸いした。「権力に屈するな」が彼の遺言となった。「ボロを着ていても心は錦」である。右翼を支援する財閥のことを最初に教えてくれた宇都宮である。

在京政治部長会に8年9カ月、その間も現場での取材を優先させてきた。先輩に田中角栄秘書をした早坂茂三がいた。彼は秘書の方がお似合いだった。

財閥は日本に限らない。その豊富な資金力で政治家をコントロールする。これは金を求める政治屋に対して一番簡単なことである。それは広告で経営している新聞テレビなども容易なのである。公共放送は人事だ。安倍がNHKに送り込んだモミイは三井である。

国粹主義を支援する読売・日本テレビ、産経・フジテレビは別格だが、朝日も危うい。従軍慰安婦記事の訂正問題を理由にして、朝日の読売化に財閥は必死なのである。財閥が牙を向く日本なのである。むろん、安倍内閣の製造者は財閥なのである。

ネットにもいろいろな指摘がなされているが、残念ながら書き手は財閥を知らない。根ツ子を叩けない。従って、現在も財閥はなんでも出来る権力の源なのだ。議会も司法も、そして政府も自由自在なのである。彼らには、法治無縁とっていい。

<中国人留学生に財閥の罠>

せめて外国の日本研究者には、こうした日本の真実を知ってもらいたい。これが20数年来の希望なのだが、どういうわけか理解されない。原因が少し分かってきた。

外国人のエリート留学生を、財閥は前もって子羊のように飼いならしてしまうのである。これは中国の高官子弟の留学生に対して、アメリカの財閥のやっている手口と同じとっていい。

中国人エリート留学生が、日本の財閥を研究テーマにして財閥から奨学金をもらうことは100%不可能である。天皇制を研究することも同様である。すなわち、本物の日本を知らないで、祖国での日本研究をしている。これこそが財閥の罠なのである。

こうして財閥は日本人のみならず、外国のエリートにも罠にかけてしまって、鉄の扉で見えなくしている。財閥は左手で車や家電などを海外に輸出、現地生産しながら、右手で安倍に改憲軍拡を迫って、既に武器輸出まで手にしている。戦争する日本にしてしまった。

北京にいと、こうした財閥の手口を見えにくくしている。

<ロシアとオーストリアの学者が感動>

筆者の指摘に感動してくれたのは、ロシア人学者とオーストリアの大学で教授をしているドイツ人学者だった。

後者はシンガ終了後の夕食会中、筆者の傍まできてくれてかなりの時間話し合いの機会を作ってくれた。中国に留学した経験者で中国語もベラベラ、通訳の周曉那も食事を止めて必死で通訳してくれた。

社会科学院で日本経済を研究している彼女は、日本への留学経験がない。それでいて日本語を中国語に、その反対も上手にこなしてくれた。彼女のお陰で、多くの取材を難なく受けることが出来た。

中国での日本研究だったことから、間違った日本認識が少ない分、筆者の通訳を最適にこなしてくれた。社会科学院の配慮によるものだった。

真実をあっけらかんと指摘した筆者に対して、多くの報道陣などから「身の危険はないか」という質問も多かった。ということは、北京まで来て日本の真実を語るものがないという裏付けもなかった。

60、70年代に活躍した宇都宮徳馬のような、信念のあるリベラル派不在の日本を印象付けた格好である。これもまた、北京での学術討論会に参加した筆者の成果となった。

<財閥研究が抗日戦争記念館で>

財閥研究はゼロか、実はそうではない。盧溝橋にある抗日戦争記念館の李副館長は、財閥に関心を持っている人物である。

ことし5月、新華社OBの張さんの案内で同記念館を訪問した。戦争遺児・影山友子の思いを伝えるための、久しぶりの訪問だった。その際の語りあいの中で、彼が財閥研究に真剣に取り組んでいることを知ったのだ。

目下、北京では戦前の財閥による強制労働裁判が始まっている。これへの支援も財閥研究の理由となっている。この記念館に財閥の金は入っていない。筆者は彼らの資金集めに協力したことがあるが、それは健全な労働組合資金であって財閥とは無関係である。

長州軍閥・山縣有朋の背後に三菱がいた。山口県田布施出身の岸信介や今の安倍の背後にも三菱が控えている。むろん、三井も。信濃町・創価学会と三菱の因縁も深く長い。

中秋節の9月8日、東京は雨模様だったが、三井グループ出身の経団連会長の榊原定征は、公然と配下の1,300社の会員に対して自公政権への献金を宣言した。5年ぶりのことだ。正に財閥が牙をむき出したものだ。カネも出すから、政策もというのだ。

<超肥大化した財閥>

既に日本は禁止していた持ち株会社を導入している。「株式所有で国内企業の事業活動を支配する新たな財閥復活と強大化」がお目当てである。戦前財閥の数千、数万倍の規模に膨らんでいる。

これを推進した通産省は財閥の下請け官庁である。これを禁じていた公正取引委員会も通産官僚

の意向に屈した。中曽根バブルで踊りまくった財閥も、崩壊を機に、持ち株会社導入で焼け太りの状態にある。他方で、いつでも労働者の首切りを可能にできる非正規雇用も勝ち取っている。

貧富の差拡大で社会不安は増大している日本である。

これから北京などで本格的な財閥研究が始まれば、日本の真実が明らかにされよう。約束したい。それは日本人の多数にも訴えておきたい。日本の民主主義の夜明けも近いはずだ。（2014年9月9日記）

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080265.html>

本澤二郎の「歴史の真実」（中国吉林省公文書館資料シンポ）社会科学院主催 安倍・自公政権に痛撃（5） 2014年09月10日

<反響続々・極右は反発>

安倍・自公政権を支援する新聞テレビのお陰で、日中双方の市民感情は悪い。北京の友人の中には「公衆の面前で日本語は遠慮した方がいい。一部に反日市民がいるので」と忠告してくれるほどだ。歴史の真実は、そうした市民感情とは別である。伝える義務がジャーナリストの使命であるため、こうして関東軍資料による学術討論会内容を公開している。その反響が予想外に多いのがうれしい。むしろ、歴史を歪曲・封じ込めたい戦前派・極右の反発も単純なもので、さほど多くはない。少数派である。極右といえども、所詮、歴史の真実に勝つことは出来ない。嘘は必ずばれてしまうものだ。

<嘘つきは人間の屑>

日本はいよいよ大変な事態に追い込まれてきた。安倍・黒田ラインのイカサマ円安政策が、国民の台所を直撃してきた。ガソリンに限らない。財政再建・行政改革を棚上げする 1,000 兆円借金大国の下での円価値の下落である。正に経済的恐怖そのものが、家計を直撃してきたのである。

アベノミクスの嘘が露呈してきたものだ。日本の価値の大幅下落に自公政権は、どう対応するつもりなのか。新たな不安におびえなければならない日本国民も悲しい。

そもそも嘘つきは泥棒の始まりという。仏教では地獄に突き落とされて、閻魔大王に舌を抜かれるとあって、強く戒めている。東電福島原発は「コントロールされている」「完全にブロックされている」という大嘘で 2020 五輪を獲得した安倍を、国際社会は知っている。

世界の 50 ヶ国ほどの首脳に対する安倍の約束も反故になる可能性を、彼らは覚悟する必要がある。嘘つき首相との対話が、もしもだが、実現した暁に中韓首脳はどう対応するのであろうか。

<信頼されない最悪政府>

安倍・自公内閣の積極平和主義は、まやかしかもいいところである。平和を口にしながら、核兵器の製造可能な原子力発電所の輸出に必死の自公政権である。東芝・三菱・日立の手先となって外交権を乱用している。

憲法9条をないがしろにする悪政は、特定秘密保護法から戦争する集団的自衛権へ、そして武器輸出へと突っ走っている。恐ろしい反憲法政策である。これぞ軍国主義復活そのものである。

嘘つき自公政権は、着実に軍事国家を目指している。東芝・三菱・日立など財閥のための武器弾薬製造と輸出に方向転換している。安倍の後見人・森喜朗の「天皇中心の神の国」という途方もない神がかりの航海へと船出している。

そこに靖国参拝・国家神道・祭政一致路線が見え隠れしている。それを米ホワイトハウスは警戒している。CIAもさぞ忙しいだろう。そんな安倍・自公政権に微笑みを投げかけるのは、ワシントンの産軍複合体・戦争屋だけである。

反省も謝罪も出来ない政権は、同じ道へと突き進むことになる。それを関東軍資料が裏付けていることになる。中国社会科学院主催のシンポジウムは、安倍・自公政権への警鐘なのだ。

<変節信濃町に衝撃>

国粹主義者と分析した米連邦議会調査局レポートはお見事であるが、以来、中国では安倍支援の公明党・創価学会に重大な懸念を抱いている。そのはずで、71年当時からの信濃町は、ひたすら日中友好を叫び、それを実行してきた。

周恩来以降の中国の党と政府は、SGI名誉会長の池田大作氏を信頼してきた。訪日する中国のリーダーは、必ず同氏との個別の会見日程をセットしてきた。

恐らく現存する日本の指導層で、中国が最も信頼を寄せる人物が池田氏だった。その池田率いる信濃町が、反中国派の安倍・国粹主義に呑みこまれてしまったことの衝撃は、計り知れないほど大きい。

特定秘密保護法も集団的自衛権も、全て信濃町がお墨付きを与えたことで実現したものだ。一体、信濃町で何が起きたのか、起きているのか？

これは中国に限らない。日本国内でも深刻な話題となって久しい。これまで信濃町はリベラル派宗教と位置付けられてきた。それが国粹主義と一体化してしまった。これの衝撃は想像を超えるものである。

信濃町にクーデターが起きたのか、それとも池田氏の変節か、それとも健康異変なのか。比例し

て、信濃町の莫大な資金にも政界関係者の注目は集まっている。過去に有名な金庫番がいたが、その後離反した。いま誰なのか。

<21世紀のM資金>

筆者には情報が少なすぎる。学会員からの集金能力に抜群の能力を発揮してきた池田氏ということも、事態を占う重要なカギである。全てを国庫に納めて貧民層に配分してもらいたいものであるが、どうだろうか。21世紀のM資金に相当する。悪しき輩は政界や信濃町にもいるだろう。国税当局も重大な関心を集めているはずだ。

横道にそれてしまったが、お許し願いたい。歴史の教訓を学ぼうとしない自公内閣へと、ついで目がそれてしまったらしい。(2014年9月10日記)

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080340.html>

本澤二郎の「歴史の真実」(中国吉林省公文書館資料シンポ) 社会科学院主催 安倍・自公内閣に痛撃(6) 2014年09月11日

<昭和天皇は平和主義者ではなかった>

敗戦後の日本では「天皇が平和主義者だった」という見解が宮内庁OBや学者らから発信、其れを鵜呑みにする国民も多い。筆者もその一人だったが、このほどまとめられた「昭和天皇実録」に関係した学者らによって、真っ向から否定された。天皇は敗戦直前まで、信仰する神社に必勝祈願していた。それは「神風が吹く」と信じた国家神道まみれの多くの無知蒙昧の庶民と同じ思いだった。当初から日本敗北を信じていた賢者はわずかだった。宮澤喜一元首相はそんな数少ない日本人の一人だったため、敗戦で「これで電灯がつく」と安堵した。徹底した合理主義者は、天皇が神などと言う馬鹿げたロジックに迷わされてはいなかった。そうしてみると、中国侵略軍の総帥として関東軍が従軍慰安婦業者に天皇勲章を与えたことも理解出来る。

<全て神頼みだった英米戦争>

敗戦時の天皇記録に詳しい明治学院大学の原武史教授が新聞の取材に明かした史実は、とても興味深い。

「天皇は現人神」のはずだった。その天皇神が、別の神に戦勝祈願をする? どういうことか。天皇家の神社は伊勢神宮のはずである。あるいは明治神宮や出雲大社なのか。しかし、一向に神風が吹かない。敗戦は必至だ。

そうした局面で天皇神は、九州の宇佐神宮や香椎宮に勅使を送って「敵国・米英の撃破」を祈願した。これをどう読み解くか?

「現人神」は偽り、架空の存在だったことになる。当たり前と言えども当たり前のことである。従って、普通の人間である天皇は、しかし、熱心な神社信仰者だった。神風を信じていた。伊勢神宮に力がないと悟ると、次々と別の神社に必勝祈願をする古代人だった。

今日からすると、マンガのような世界で生きていた。それが明治に確立した祭政一致・国家神道の真相だったことになる。

シンポジウムで安倍の後見人・森喜朗は「日本は天皇中心の神の国」と信じ込んでいるが、それは安倍も、そして2人が心酔した岸信介もそうだった。国粹主義者の観念であると紹介したが、それは昭和天皇も、だった？ 日本の近代化も、一皮むくと、およそ前近代・シャーマニズムそのものだったことになる。

<キリスト教改宗にも？>

敗戦後の天皇は、すこぶる人間的に振る舞うようになる。実録などから判明したことは、A級戦犯が東京裁判の結果、戦争犯罪者として処刑される時点で、天皇はキリスト教関係者とひんぱんに接触する。

もはや無力の敗戦神社・神道では、戦後を生き抜くことは出来ない。そう考えての行動であろう。原教授は「キリスト教への改宗を本気で考えた」と想定する。そういえば、皇太子妃はキリスト者である。

神道で国を救うことは出来ない。ならば捨てればいいのか、それが出来ない。別の宗教へ？ こうした心理状況が天皇の価値観なのか。何かを信仰していないと安心できない。弱い人間には理解出来るかもしれないが。幼時期からの教育と関係があるのだろう。

正に、弱い人間天皇そのものだ。

国家神道の流れは、財閥や官庁でも継承されていることに気付いてそう長くはない。公共の建造物を立ち上げる際、神道の儀式である地鎮祭を行う。財閥の建物の一角には神社を設置している。自衛隊内の神社を見たことがある。これも不思議なのだが、無力・神風の吹かない神道は今も生き抜いている。自民党内には神道派グループが形成されているが、その筆頭が森や安倍。最近では外国通信社にネオナチとして大々的に報道された高市・稲田という女性議員がいる。むろん、安倍側近の国粹主義者で知られる。

夏や秋の祭礼に庶民も巻き込む風習は今も、である。これに抵抗した戦争遺児・影山友子は偉かった。彼女は公明党の太田や山口・北側とは違った勇気ある人物だった。

シンポジウムは9月1日に行われた関係で、昭和天皇実録を承知していなかったため、あえてここで追加することにした。前近代そのものの政教一致体制は、飯島勲がいうように公明党だけと限

らない。

神がかり・カルトが、いまも日本社会を覆っている。ここに歴史認識の危うさが存在しているのだが、外国人には全く理解できないでいる。

<身代わりに沖縄を差し出す>

敗戦による新憲法で、日本国民が主権者という民主憲法が誕生した。これは戦争放棄と人権尊重の世界に冠たる憲法である。

それでいながら天皇は、マッカーサーに「沖縄をどうぞ」と差し出した。これは大変な犯罪である。法的に成り立たない。天皇自ら違憲行為をしたことになる。

したがって、マッカーサー会見は実録に載せていない。この実録もまた偽りの部分を残してしまった。69年経っても秘密、目下の特定秘密保護法が怖い。都合の悪いことは隠す、歪曲するという悪しき体質は、吉林省公文書館が公開した関東軍資料からもわかる。それを指摘した中国人学者がいて当然だった。

明治以前の薩摩藩に侵略された琉球は、それゆえに日米戦争の渦中に叩きこまれ、敗戦後もずっとワシントンに占領されてきた。琉球・沖縄の真実もまた、正しく教育の場で教えられていない。

歴史の真実に向き合えない日本政府に、多くの日本人はひたすらたじろぐばかりだが、それでいいのだろうか？ 日本国民は1945年9月3日に、事実上、主権者の地位を獲得したはずである。目を覚ませ、といたい。

すばらしい憲法を手にしなが、それを行使できない日本人、確か自治大臣をした白川勝彦が筆者にそう指摘していた。彼は大平正芳や宇都宮徳馬を尊敬した勇気ある弁護士である。(2014年09月11日記)

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080452.html>

本澤二郎の「歴史の真実」(中国吉林省公文書館資料シンポ) 社会科学院主催 安倍・自公政権に痛撃(7) 2014年09月12日

<日本侵略軍(関東軍)特徴の第一は野蛮性>

中国侵略の特徴を、吉林省公文書館の研究者は、その分析から3点挙げた。言うまでもなく、悪逆非道な、正に蛮行そのものにある。軍事要員も一般人も関係ない。非戦闘員である女性や子供さえも殺害の対象にしてしまう。そこに生きている全てを無差別に殺害してしまうと見られても仕方がないほど、その手口は徹底していた。

軍紀はあって無きが如し、が関東軍に見られる。南京大虐殺然り、731部隊の生体実験は、悪魔に魅入られた日本軍を印象付けている。

消却から免れた資料の全てから判断出来るものだ。皇軍・天皇の軍隊は、それでいて頂点に立つ天皇は戦争責任から免れた。東京裁判最大の汚点となった。

731部隊関係者は実験資料を全て差し出す見返りに免罪となった。ワシントンの協力者になることで、安倍の祖父・岸信介は釈放され、CIA工作の下で首相の座を射止めてワシントンに協力した。

日本は、アメリカの対アジア太平洋戦略の軍事的要石に位置付けられてしまった。岸の孫である安倍は、公明党の協力によってアメリカの戦争に参戦する集団的自衛権を行使する日本に変質させている。日本のネオナチ政権誕生が、吉林省公文書館秘蔵の資料公開となったものであろう。

<第二は厳密秘密性・情報管理の徹底>

中国の学者は、公開資料から侵略関東軍の厳密な情報管理にも注目した。恐ろしい蛮行に比例して、それを記録、徹底した情報管理に驚愕させられたのだ。その結果、南京に30万人もいなかった、という日本右翼の論拠を、関東軍資料によって粉々に打ち砕くことが出来た。

「1940年5月、関東軍は思想対策要綱を作成して情報管理と情報操作に取り組んでいた」ことも明らかにされた。

要は、いかがわしいためにする右翼の暴言を阻止することに成功したのだが、それもこれも消却を免れた関東軍資料のお陰である。確かに郵便物の監視・チェックは徹底していた。それを民間人まで拡大している。自国民を信頼しない関東軍の所業は、いまの安倍政権にも引き継がれている。

9月11日の夜、朝日新聞首脳は東電福島原発事件にからんでの、やや行き過ぎた表現「命令に違反」報道を撤回、謝罪した。東電報道の嘘と隠ぺいに貢献してきた他のNHKその他の新聞テレビ記者が、朝日首脳部を攻撃する記者会見が延々と繰り返されたが、まさにマンガである。

問題の「吉田調書」は、朝日報道によって政府が渋々公開したものだ。朝日たたきも度が過ぎよう。読売・産経などは他山の石とすべきではないか。気になったのは、東芝製3号機について「水素爆発」と記述してある。これは吉田本人の嘘か、それとも核爆発も理解できない無能な現場責任者だったのか。あるいは役人が、吉田証言を改ざんしたものなのか。嘘と隠ぺいに屈する新聞テレビに変わらない。

従軍慰安婦の朝日誤報にしても、安倍は鬼の首を取ったようにはしゃいでいるが、国際社会が認知している深刻な事件を国民に知らしめた効果は大きい。間違ったら反省・謝罪すれば、だれも過ちを償うことが出来る。このルールは安倍にも通用する。福島原発を「ブロック・コントロール」という大嘘を、国際社会に対して、真摯に謝罪すべきだろう。

2020 東京五輪が開催できるか、まだ不透明ではないのか。コントロールもブロックもされていないのだから。何も知らない小渕新大臣も哀れだ。

天皇実録でも表面化した「天皇が沖縄を米国に提供した」などという暴走行為を、今も知らない国民がいる。こちらのほうが数万倍も問題であろう。沖縄独立論が存在するという話を聞いたばかりだが、大いに理解出来よう。

嘘つきは「人間の屑」である。

<第三は詐欺的で嘘つき>

この詐欺的な対応、嘘つきもまた、関東軍の特徴である。中国人学者の研究は、ここも見逃すことはしなかった。

「日本軍にとって不利なことは、削除せよ、と直ちに厳命する。日本国民に知られるとまずい問題を隠ぺいする。これも徹底している」と指摘された。過去を美化したい輩は「皇軍の軍紀の厳しさ」を喧伝するが、現場は正反対だった。

埴生の宿の本を整理していると、毎日新聞記者による「日本軍は中国で何をしたのか」（葦書房）が目にとまった。日本軍の蛮行を自ら写真に撮って「戦果」にしようとしたものであろう。南京大虐殺（大屠殺）記念館のそれを複写したものが、これには掲載されている。いまだ多くの日本人が知らない過去の真実である。

日本侵略軍の蛮行が、日本軍が撮影した写真で、これでもか、これでもかと裏付けている。「30万などありえない」とわめく日本人は、決して現地に立とうとしない。まずは「南京に立て」と叫びたい。そうして日本人は人間になれるのである。安倍や太田・山口は現地に立つことを薦めたい。
(2014年9月12日記)

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080543.html>

本澤二郎の「歴史の真実」（中国吉林省公文書館資料シンポ）社会科学院主催 安倍・自公政権に痛撃（8） 2014年09月13日

<日中首脳会談の行方>

報道陣が大挙押し掛けるとい中国での国際学術討論会は、初めての経験である。主催者側の熱意もさることながら、吉林省公文書館の公開資料の全てが関東軍保管の超1級のもの、しかも日本軍侵略を象徴する南京大虐殺や731部隊関連が含まれていたからでもあろう。中国の学者もまた、現在の中国を代表する人物を選抜していた。短い昼食時間は、社会科学院の食堂の弁当を手にして、

思い思い円卓を囲んでとった。そこでは、期せずして11月APECの日本と中国の首脳会談の行方についての意見交換もあった。

<露骨すぎる反中・極右政権>

日本の防衛白書は、中国敵視政策を前面に出して軍拡を大々的に具体化している。血税を死の商人にばらまき始めている。米ペンタゴンとは日米防衛協力、いわゆるガイドラインの深化に突進する安倍・自公内閣である。

外務省の白書もまた中国脅威論を全面に掲げている。尖閣関連の報道では、NHKがこれまた大々的に宣伝している、そんな危うい極右政権である。過去に反中親台湾の岸・佐藤政権が存在したが、これほど露骨な反中政策はなかった。

武器輸出3原則を取っ払い、平成の治安維持法と言われる特定秘密保護法、ついで閣議決定で集団的自衛権の行使を決めた。公明党の強力な支援の結果である。池田大作氏の平和主義の化けの皮が剥がれた瞬間である。

<毅然とした対応を求める日本研究者>

歴代の政権における中国認識は、たとえば福田赳夫は「非常に遺憾なことをした」、鈴木善幸は「深い反省を感じ、そして反省をしておる」、中曽根康弘は「中国に対しては侵略の事実もあった」、海部俊樹は「侵略的事実を否定できない」、宮澤喜一は「わが国の行為について侵略的事実を否定できない」、細川護熙は「過去の我が国の侵略行為や植民地支配などが、多くの人々に耐え難い苦しみと悲しみをもたらしたことに、改めて深い反省とおわびを申し述べる」、村山富市は「我が国の侵略行為や植民地支配などが多くの人々に耐え難い苦しみをもたらしたことへの認識を新たにし、深く反省の上に立った立場で、不戦の決意のもと、世界平和の創造に力を尽くしていく」などと国会で答弁している。

こうした政権からは、安倍・自公政権のような露骨な反中政策は生まれない。当然のことながら「毅然とした対応」が、日本研究者の主流とみたい。

<安易な政治的妥協は禍根を残す>

要するに、一連の安倍・自公戦略に対して、いまや世界の経済・軍事大国となった中国の人民の反発は、決して小さくない。安易な妥協は、日本の極右政権に屈した、という印象を人民に与えかねない。

昔のような中国ではない。人民の意思はネット社会を通じて、中国共産党や政府にビンビンと入ってくる。

たとえば習近平体制の腐敗退治は、ここ数十年来と比較すると、考えられないほど大掛かりに展

開している。その点で、日本などは足元にも及ばない。日本最大の医療グループ・徳洲会疑獄に対して、東京地検特捜部は青森県警のレベルにも届いていない。小さな選挙違反事件でさえも、収賄側に対して一人も逮捕者を出していない。「特捜部を廃止しろ」が世論となってきた。

史上空前の放射能被害を出している東電福島原発事件では、未だに誰も捕まえていない。日本国民の不満は増大している。他方、習近平体制による腐敗退治を人民の多くは支持している。「権力闘争の側面もある」とする一部の指摘はそうかもしれないが、腐敗が許容される社会は健全とは言えない。

内政では、このほか節約を徹底して腐敗の芽を断ち切っている。これも関連して鮮やかである。贅沢なレストランは、庶民的な料理に切り替えて庶民サービスを心掛けている。

日本では前厚労相などが入り浸ったアスカの迎賓館などの施設が、もし中国で発覚したら関係者はたちどころに拘束されるだろう。ネット社会が放任しないからである。「腐敗役人や金持ちは震え上がっている」「海外に大金を持ち出す悪人に目を光らせている」という中国事情は、日本に比べると、ずっと健全であろう。こうした人民の目覚めは、外交政策の面にも向けられている。

<中ロ関係の深化で安定確保>

クリミア・ウクライナ問題でミソをつけてしまったとされるロシアは、中国重視に真剣である。最近では、ロシアの天然ガスパイプラインを中国に引くという画期的な計画が明らかになった。

超大国から滑り落ちているアメリカ、そのお尻にしがみついた日本の凋落、そこでの暴走も、中ロ関係の深化がそれを食い止めるだろう。安倍・自公政権は、インドとロシアのプーチン接近で中国封じ込めを狙っているが、そこに背後のワシントンのネオコン・戦争屋がいたとしても、手を出せる状況にない。

こうしたことから、中国の対日外交が揺らぐことはない。安易な妥協はしない。ワシントンからネジを巻かれている韓国の朴政権でさえも、歴史認識で屈服する考えはない。中韓とも自らの大義に自信を持っている。吉林省公文書館の「鉄証如山」出版の背景にも、毅然とした対日政策を印象付けている北京、と筆者の目に映るのだが。（2014年9月13日記）

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080624.html>

本澤二郎の「歴史の真実」（中国吉林省公文書館資料シンポ）社会科学院主催 安倍・自公政権に痛撃（9） 2014年09月14日

<財閥の蛮行を浮かび上がらせる資料>

シンポジウムは中国語・英語での同時通訳で進行した。日本語とロシア語には、個別に通訳がつ

いた。そのお陰で、全てではないが参加者の発言の要点を、大学ノートにメモすることが出来た。その発言に重い価値のあることが理解出来る。財閥の蛮行も浮上させている。同時に、被害者の無念・怒りが今に継承されている重みを感じさせる。

<南京大虐殺の証拠の隠滅工作>

関東軍資料から「1937年12月13日から6週間に渡り放火」との史実も明かされた。1ヵ月半にも渡る放火で、虐殺現場の証拠隠滅を図る侵略皇軍の恐ろしいまでの悪魔性を裏付けている。戦争そのものに人間の悪魔性を認識できるが、そうだとすると皇軍・天皇の軍隊の其れは史上空前のものであった、と決めつけるほかない。

「憲兵による治安報告や難民帰還報告もある。その一部が日本の新聞（大阪毎日新聞）に掲載されている記事も見つかった」

治安維持法国家でもあった当時の日本軍憲兵は、現場の状況についても事細かく記録、それを大本営に報告していたことになる。

慰安婦関連書類もある。「109人のうち25人が中国人、30人以上が北朝鮮の女性だった」「全体で3,000人を超えていたという書類もある」「1人で267人の兵士の面倒を見ていた計算になる記録も」「明らかに日本の国家的行為そのものだ」「日本人同士の手紙のやりとりでも重大な事実が判明する」

大阪市の橋下市長やNHKのモミイ会長には、もう一度勉強してもらいたい。

日本の真実、その恥部を知ることは辛いものだが、歴史の隠ぺいや歪曲でその原因を作った以上、しっかりと直視する、逃げてはならない。教訓とするほかない。歴史を教えられてこなかった全ての日本人は、このことから目を背けてはならない。

中国の慰安婦研究の第一人者で知られる蘇知良教授は「現在も23人の元慰安婦がいる。平均年齢83歳。海南省にいる」と報告、同時に「中国は全ての公文書を公開すべきである」と訴えた。

<特別移送と経済・労働侵略の発覚！>

筆者も耳にしたことのない「特別移送」に関する記録も続々と見つかった。特別とは、正に特別に、強制的に、という意味なのだろう。その対象はソ連人や中国人。

「労働者を強制的に集めていた実態」は貴重な資料だ。このことについてのロシア人学者の「日本の中国経済侵略・労働侵略は、これまで十分知られていない。これからは、この分野の研究が必要である」との指摘に特別、注目したい。

日本軍国主義を容易に実現した天皇制国家主義、その最大の受益者は日本の財閥である。侵略

推進勢力は財閥なのだ。これの研究がなされてこなかったことへの反省の弁と、今後の最大研究課題だとするロシア人学者の眼力に共鳴したい。

<危機的な日本財閥！>

三井や三菱など財閥による強制労働の実態は、司法をも牛耳る財閥政治の下で、日本での訴えを全て却下してきた。それが現在、北京やソウルの法廷で裁かれている。日本財閥は目下、最大の危機を迎えている。日本の新聞テレビがこうした流れを報道することは決してない。彼らのスポンサーが財閥だからだ。公共放送のはずのNHKの責任だが、それゆえに財閥は安倍に命令して、財閥代表の三井のモミイを送り込んだものである。

戦争体制への促進に安倍・自公政権は「積極的平和主義」という美辞麗句を用いるが、これは「敗戦」を「終戦」と呼び変える悪しき官僚の知恵であろう。中国・東北地方への移民政策を、当時の政府は「開拓」と称した。

「移民団とすべきところを、開拓団とイメージアップを図った。日本国内では大陸開拓文学を出版していた」のである。「実際は侵略そのものだった」と断じる中国人学者だ。「捕虜を特殊工人と呼んだ。慰安婦を戦時の妻と呼んでいた」とも紹介した。

この学者は、公明党と安倍・自民党が強行した特定秘密保護法を「軍事国家へ向けた法律。日本の言論統制が目的」「安倍のインド工作から大東亜共栄圏を連想できる」などと決めつけた。

<30万人の移民侵略>

30万人と言うと、南京大虐殺を思い出す人は多い。

吉林大学の沈海濤教授は、9・18事件に関連して「東北地方への移民数30万人に、改めて日本侵略のすごさを認識した」と感想を述べたあと「1942年8月の満州・モンゴル政策による農業政策は、ほとんどが略奪した農地だから、東北人民の強い反発があった」「軍事名目で庶民の土地を略奪、そのため土地に関する資料も沢山見つかった。従来、移民資料は間接的なものばかりだったが、今回は直接資料。そこから日本人の思想と行動様式がわかる」「日本人の中にも移民団から逃げようとした者がいた」と資料から指摘した。

日本研究者にとって宝の山を見つけた思いなのだろう。関東軍資料から、新たな視点で歴史研究を深めてゆくと、現在の安倍・自民党極右勢力と、従来は平和勢力だった公明党二つの連立政権の分析に役立つのかもしれない。そんな関係者の思いも伝わってきた。

彼は二つの結論に達した。「日本の開拓団は、その実、大陸侵略拡張団。慰安婦も同様である」「もう一つは、移民制度こそが日本の植民地政策そのものである」

日本の右翼は欧米の真似をただけのことだ、と開き直る。これは被害者を説得するどころか、

恨み・憎しみの再生産を約束するだろう。日本人の弱点は、相手の立場に立とうとしない、被害者の苦悩をとことん、理解しようとしなない。思いやりがない。それは財閥が、正にそうである。モミイの発言からも容易に理解できるだろう。（2014年9月14日記）

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080709.html>

本澤二郎の「歴史の真実」中国吉林省公文書館資料シンポ（社会科学院主催）安倍・自公政権に痛撃（10） 2014年09月15日

<オーストリアのドイツ人学者が日独の落差指摘>

「ドイツと日本の歴史の差を研究している」というオーストリアの大学副学長のゲリン教授は、中国人にとって実にありがたい人物だ。それというのも、彼女は中国がべらべら、通訳不要である。それに中国に来た目的が「ドイツの歴史の教訓」を伝えるためというのである。安倍ら日本の極右がもっとも恐れる学者とっていい。

したがって「日独のキーワードはアメリカ」であると指摘する。アメリカに振り回される度合いがポイントだ。無論両国ともいまでも、その影響下にある。ただし、その中身に大差が生じている。自立するドイツ政府と、いまだに従属するばかりの日本政府。例外は安倍の靖国参拝だ。しかも、現在の日本の極右政権は、ワシントンの戦争屋（ネオコン・産軍複合体）との深化にのめりこんで、危険で反憲法的な改憲軍拡へと舵を切っている。ここはドイツとの大きな落差だ。

歴史の教訓にまったく向き合おうとしない日本を、彼女は理解することが出来ないでいる？ そんな印象を受ける。

「ドイツは隣国と近い。戦後、直ちに戦争を起こしたことを強く反省した。日本はつい最近のことである。ドイツは東アジアのような地理的条件にないが、ドイツ人は、よく反省しないと隣人と仲良くなれない、それが歴史の教訓だと考えている。反省は今も続いている」

以上のゲリン女史の明快な説明に、すべての人々は納得するだろう。「日本人はどうして出来ないのか」が世界の不思議なのである。背景に天皇制国家主義の復活が見え隠れしているのだが。そこを日本の言論人はまったく伝えない。

ともあれ、独仏関係と日中関係の落差ははなはだしい。彼女の指摘するように、日本はいち早く友好派の政権の樹立が喫緊の課題といえよう。安倍・自公政権を葬り去る必要がある。主権者の責務なのだ。

「歴史の反省は今も続いている」というドイツを、安倍・自公政権を除いて、世界は尊敬と信頼を寄せている。

<ロシア人学者の鋭い日本分析>

「日本は軍国主義から離脱したはずだったが、いま再び復活への動きが見られる。歴史認識にしても、事実を歪曲するなど、日本の対応は他国と異なる。具体的にいうと、それは集団的自衛権の行使、特定秘密保護法、武器輸出、ロシアとの領土紛争、それに靖国参拝などである」

現在、北京に駐在して東アジアの歴史を研究しているロシア人のニコライ博士は、安倍・自公政権の正体を見抜いている。中国語と日本語を駆使するベテラン研究者だ。国際社会は自公・極右政権の動向に油断していないのだろう。

安倍との協調を見せているかのようなプーチン政権は、他方で、極東での軍事演習に手抜きなどしていない。日米産軍体制の動向を警戒している。そんな印象を受けるロシア人学者の分析は鋭い。

彼は、そうした自公政権を踏まえうえて「吉林省公文書館の関東軍の生々しい書類の山は、高く評価される」と断じた。歴史研究者にとって、関東軍資料は宝の山なのである。

「ロシアと中国の協力が不可欠である」とも呼びかけた点を注目したい。中ロ関係は、安全保障や経済関係で相互補完の関係が強まっているが、対日歴史の研究分野もまた同様であるという。

こと歴史認識についていうと、米ホワイトハウス・北京・ソウル・モスクワ・ロンドン・パリ・ニューヨークなど国際社会の安倍・自公政権包囲網は確立してしまっている。

「日本は天皇中心の神の国」とする国家神道の再現など、人類の誰もが目にしたくないだろう。そんな感じを与えてくれたロシア人学者の講演だった。

<安倍・自公政権は「平和の敵」と社会科学院研究員>

「70年代に平和を獲得した東アジアが、昨年からおかしくなっている」と発言の冒頭から指摘したのは、中国社会科学院近代史研究所の高研究員。

従来、親中派と見られる行動をしてきた公明党と、極右の安倍・自民党の連立政権の動向をしっかりと分析、その野望を、彼は見抜いていたのだろう。

「安倍は第一次組閣以来、侵略について一度も話したことがない。毎回矛盾した発言を繰り返している」とも決め付けた。中国の研究者は安倍の一言半句をも監視の対象にしている。感心するほかない。

2013年12月の靖国参拝にも特別言及した。それは「中国が一番の被害者」だからである。多くの日本人は、恥ずかしくて悲しいことだが、加害者であるとの観念が薄い、もしくはない。

広島・長崎の原爆投下による被害を学んでいるが、加害の事実を、肝心の教育現場で教えていな

い。教師の怠慢の背後に政府の意向も関係している。他方、中国は被害の実情を、歴史の教訓として教えている。二度と同じ悲哀を受けないための防御策でもある。

日本との落差がいま安倍・自公政権の下で、極端に拡大している。当然のことである。まやかしの平和主義、それも積極平和主義を口にしながらか、戦後秩序崩壊のため、改憲軍拡へと大きく舵を右に切っている。そのことを新聞テレビは触れようとしない。この異常さを、北京からだとよく見えるのだ。

彼は「日本侵略によって10カ国の血が流れている。にもかかわらず、侵略を否定している。（安倍・自公政権は）平和の敵である」と決め付けた。

<台湾学者は財閥の野望を証明>

台湾の黄研究員の発表も貴重なもので、それは日本の財閥の野望を証明してくれるものだった。それは日本の投資額を立証することによって裏付けた。

「1931年の東北への投資額は、当時の金で17億円以上になる。この年の日本政府予算は14億円だった」

この数字は、あきれんばかりの金額である。軍国主義下の日本政府予算は、極端に膨れ上がっていたころである。その額をはるかに上回っていた投資額だ。17億円の詳細がわかれば、日本財閥の個々の野望を分析できるだろう。

日本財閥の資源略奪策は、朝鮮半島から大陸へと拡大していった。しかも、それは一時的なものではなかった。永久に半島と東北地方を自己の領土にするという、まさに帝国主義の正体を見せ付けるものだった。

中国の大地を農民から略奪、それを30万人の日本移民に分け与え、生産物・鉱物資源をも手にする財閥。軍閥利用の財閥の作戦は、戦後の今、安倍・自公政権下で繰り広げられている。三井・三菱など日本財閥に操られる安倍・自公政権が見えてくるだろう。（2014年9月15日記）

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080783.html>

本澤二郎の「歴史の真実」中国吉林省公文書館資料シンポ（社会科学院主催）安倍・自公政権に痛撃（11）2014年09月16日

<中韓連携が確立した歴史認識研究>

孫文の中国革命に奔走した日本人は、よく知られているが、同じような事例は韓国・朝鮮人にもいた。新羅大学の教授の発言内容である。それは今後の、対日歴史認識における中韓協力を印象付

けるものであった。従来は、中国も韓国も、日本右翼からの途方もない問題提起に対して、それぞれ別個に対応してきた。それが安倍・極右政権の登場で、被害国同士が連携して対抗することが当たり前になった。したがって、歴史認識に対する両国の反発は強まるこそあれ、弱まることはない。それは孤立化する日本と中韓連携をも意味する。その分、歴史の真実は、より客観的・広範囲なものになる。安倍・自公政権にとって、これは手ごわいものとなろう。

<1920年、上海に抗日臨時政府>

安倍ナショナリスト政権の登場についての隣国の厳しい反応を、日本の新聞テレビは正しく伝えようとしていない。それどころか、逆に負の報道に徹している。比例して被害国同士の連携は強まっていく。

1920年に半島の抗日臨時政府が上海に樹立されたことを、日本人のほとんどは知らない。「20世紀初頭、韓国・朝鮮人の留学生は、革命を支持してきた」という史実に無頓着なのだ。

「1938年には朝鮮義勇隊が重慶で活躍している」「これらは中国を助けると、韓国にプラスという判断からだった」

こうした中韓の協力環境が、現在の安倍・自公内閣のもとで具体化してきた、と筆者は感じる。日本国民は、大事な隣国とのこうした深刻な事態に敏感でなければなるまい。

<海南島に動員された韓国・朝鮮人>

韓国東亜政策研究院・東国大学の金教授は、海南島に移送された韓国人のことについての研究成果を発表した。これも初耳である。

何度か海南島に旅したことがある。そこで目撃した鉄道は日本軍が敷設したものとの説明を受けていた。日本軍が現地住民を強制動員した実績だと認識していたのだが、半島からも大量の韓国・朝鮮人を強制労働させていた。

「半島からは強制労働者、一般労働者、慰安婦も動員させられていた。港湾・鉄道の建設工事に従事させられていた。三菱鉱業や浅野セメントで」

日本軍は、現地の人たちだけでは不足と考えて、はるか植民地支配していた半島の人たちを、そして駐屯する日本軍のために慰安婦までも動員していたことになる。

悪法の国家総動員法は半島にも及んでいたことになる。

「1943年には、朝鮮愛国分遣隊として前後8回にわたって300人から400人が。年齢は24歳から40歳。総計2,500人から3,000人が動員されていた」

むろん、まともな労働者としてではなかった。奴隷扱いだから、途中で倒れたり、亡くなったりした者もいたに違いない。

彼は恐ろしい話を生存者から聞いていた。「三亜では大きな穴を掘らされて、そこに 1,000 人ほどを生きたまま埋めた」というのである。現地では 1,000 人坑と呼んでいた。証拠の隠滅のためであろうか。人間扱いどころではない。これほどの非人道的な犯罪も珍しい。さらなる真相解明が待たれよう。

以前に中ソ国境地帯を旅したとき、広大な草原の地下壕に驚かされたものである。日本軍の地下基地であるが、そこでは中国人を大量動員した。完了した後、皆殺しにしたという。同じようなことを海南島でも行っていたのであろう。

海南島の慰安婦の多くは、戦後も半島に戻らなかった。戻れなかったのだ。もしも、慰安婦であることが知れたら、故郷で生活することは出来なかったからだ。慰安婦の人生ほど過酷で悲しいものはない。

安倍やモミイにわかるまい。

<李薇所長の総括>

「内容が豊富すぎてコメントできないほど」といって、社会科学院日本研究所の李所長は満足そうに総括した。

「日本軍が書き残した資料ゆえに学術的価値は高い。空白を埋めることも出来た。生物化学兵器のことも今回出てきた。特殊工人についての研究不足も明らかとなった」

「事実によって、日本から飛び出してくる歴史の美化・正当化に反撃が可能となった。中国の青少年の教育にもなる。それは日本の青少年の教育にも」

「真実を明らかにするために、相互交流の重要性も確認できた。ロシア・韓国との相互研究を推進する必要がある。公文書館の資料はまだたくさんある。今回、そのきっかけを作ったことはすばらしい成果といえる」

9・1 吉林省公文書館秘蔵資料の公開学術討論会を締めくくった主催者は、終わりのないような重い課題に、新たな挑戦を開始する意欲を感じた。(2014年9月16日記)

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080868.html>

本澤二郎の「歴史の真実」中国吉林省公文書館資料シンポ（社会科学院主催）安倍・自公政権に痛撃（最終回） 2014年09月17日

< 確立した中露韓体制 >

今回のシンポジウムから見えてきたことの一つは、東アジアにおける歴史認識の共有である。その原動力はいうまでもなく、中国の台頭である。その上で、吉林省秘蔵の関東軍の生々しい資料、証拠の山が加わった。その一部が本になった。「鉄証如山」である。もはや安倍ら極右の歴史の歪曲・大嘘は通用しない。皇国史観の再現は不可能である。たとえ日本のマスコミや議会が右翼に制圧されても、国際社会が承知しない。グローバルな世界では、神がかりの天皇制国家主義の復活は、欧米は無論のこと、アジアでも許されないだろう。背後で蠢く財閥の野望も通用しない。文字通り、中露韓体制の確立を印象付けるものだった。

< 69 年前を記憶する東アジア >

欧米で極右が幅をきかせることは出来ない。それはアジアにおいても同様である。歴史の真実からは、極右といえども逃避できない。ナチスの再興は 100%ないように、日本の極右政権もまた、清算される運命にある。靖国参拝、侵略を認めない、慰安婦にも目を向けない、そんな安倍を受け入れる国も人々もいない。金のばら撒きでも。

シンポジウムには台湾の学者も参加した。昔なら想像できなかったことである。ドイツ人学者と中露の学者がひざを交えての歴史認識の共有も、である。この会合に日本の新聞は毎日新聞 1 社だった。他は無視したらしい。その毎日も記事にしたと聞いていない。単なる偵察取材に過ぎなかった？ おろかだ。

< 財閥研究へと始動 >

日本の政治を操っている実態、権力の源、3 権を掌握しているのは、戦前も今も財閥である。こうした認識が徐々に生まれてきた。そう感じるシンポジウムだった。ロシア学者の経済侵略論が注目を集めた。

筆者の通訳を務めてくれた有能な研究者は、社会科学院で日本経済、特に総合商社に焦点を当てている。これからは三井や住友、三菱など本丸の財閥にも目を向けるだろう。

財閥と政界、財閥と官界、財閥と司法界へとメスを入れると、日本が見えてくるだろう。敗戦後の日本で、真っ先に財閥を解体させたワシントンは、この財閥を押さえて日本操作しているのである。

< 反省と謝罪をしない国や民族に永遠の怒り >

人間は過ちを犯すものだが、日本軍国主義下の日本軍の蛮行はまったく弁解の余地がない。それは数百年かかっても、被害者を納得させることは出来ない。ことほど恐ろしいことをしてしまった。そのことさえも、多くの日本人は気づいていない。教育のせいでもある。それどころか右翼は、歴

史の真実究明を「自虐すぎる」と反発する。

本末転倒である。安倍側近の女性大臣は「われわれがやったことではない」と平然と開き直る。こうした対応に被害者の深い傷は、ひりひりと痛むのだが、それさえも安倍らには理解出来ないらしい。

反省と謝罪を真摯に出来ない国と民族の将来は明るくない。ドイツは見事にやりぬいた。敬意を表したい。日本もそうしなければならない。国際社会の信頼を得ることは出来ない。

安倍・自公政権の下では、被害者の怒りは永遠に続くだろう。

<米国の医療事故でもリンチ>

医療事故の被害者として15年ほどになるが、加害者が反省と謝罪をしないと、被害者の怒りと憎しみが消えることはない。それは法律も被害者を守らない日本では、なおさらのことである。

米国での医療事故で息子や娘を失った遺族は、加害者に私刑・リンチを加えるという話を聞いた。著名な大学の教授が「もし私の息子が医療事故で殺され、それに対して病院と担当医が謝罪しなければ、彼らを殺すだろう。これが親の気持ちなのだ」と語ったという。

彼の発言は本当なのだ。体験者であれば理解できる。

<戦争遺児の死にも憎しみ>

戦争遺児・影山友子の無念の生涯にも、それがいえる。69歳の人生に終止符を打たせた犯人は、5ヶ月以上経ったいまも反省も謝罪もしていない。

真実を知る被害者の無念を、誰かが継承することになる。加害者はそのことに気づくべきだろう。個人レベルでも反省・謝罪が唯一、過ちに対する償いである。人間として当然の対応だろう。

人間は過ちを犯す。その場合、逃げる、隠れる、隠蔽、うそをつく。これはまともな人間のすることではない。そこから憎しみと争いが起きる。民族や国のレベルだと戦争に発展するだろう。

<償いのないところに怨念は永遠>

安倍は首相になる資格はない。NHKのモミイもそうである。閣僚中にも、自民党の中にもいる。反省と謝罪でしか、過ちを償うことは出来ない。生きられる人生を途中で断ち切られた無数の民が、中国などに存在した。いまその子供や孫たちが、無念を噛みしめて生きている。償いのないところに被害者の怨念が消えることはない。(2014年9月17日記)

<http://blog.livedoor.jp/jlj001/archives/52080937.html>